

「四衆同行」
ししゅどうぎょう

山口県 だいかくじ 大覚寺住職 末益泰輝 すえ ます たいき

「四衆同行」は、数字の四に、大衆の衆、同は同じ、行は行くという字を書きます。「四衆同行」は、仏教の大切な教えで、立場や年齢、性別に関わることなく、互いに同じ志を持つて心を配り、助け合いながら修行に励むことをいいます。

さて、二十年前から毎月一回、お寺で坐禅会を開いています。参加者は、小学校低学年から八十代前半までの老若男女。遠方から、車で三十分以上かけて来る方もいらっしゃいます。早朝のお寺の本堂で、年配の方から小学生までが一緒に姿勢と呼吸を調べ、静かにじっくり坐っている様子を見ると背筋が伸びるようです。座禅会は、午前六時半から二十分の坐禅、続いて般若心経のお勤めをします。その後はお茶を頂きながら、その日の感想を述べたり、お互いの近況報告をします。

コロナ禍になる前は、坐禅の後はお茶会ではなく、みんなでお粥を頂いていました。食べる前に、食事の心構えを示した「五観の偈」ごかのげというお経を読み、お粥を頂きます。お粥を頂いたら、お茶と一切れのお漬物で自分が使ったお椀を洗い、最後にそのお漬物を食べお茶を飲み干し、その後食後のお唱えをして終わりとなります。大人の方は「食べる時は、お椀をちゃんと持とうね」とか、お椀の洗い方を優しくアドバイスしています。子どもたちは、その助言を真っ直ぐに受け止めて実践します。こうした食事の作法を大人は手際よく行いますが、その真似をしながら子ども達が一生懸命に取り組む姿が、とても微笑ましいのです。

その様子を見て、私は「四衆同行」、同じ志を持ち心を配り助け合いながら修行に励むという教えを目のまえで見せていただき、毎回清々しい気持ちを感じています。